

会議名	第13回 多様な学習支援事業に関する検討会議
開催日時	平成29年11月17日(金) 14:00~16:00
場所	科学技術学園高等学校 C棟 会議室
出席者	別紙資料
議題等	1.第4分科会研究報告 津島教務主幹、松田通信制課程教頭 2.研修 杉下理事長



全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と
全通併修についての調査研究
(第4分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

全日制からのニーズ

- ◎不登校生または不登校経験者への対応
- ①不登校の経験があり、3年間通えるのか不安
 - ②学習意欲はあるが、教室での一斉授業が負担
 - ③友人関係のトラブルからの不登校

生徒・保護者ともに
入学した学校の卒業を希望
学校も「卒業させたい」という気持ち

個々の生徒への対応が困難
→退学
他校(通信制やサポート校)へ転学

全日制とのコラボレーションの問題点

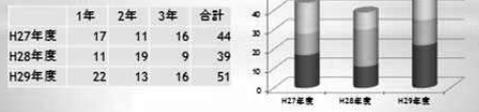
1. 通信制全般に対する不自信
 - ①安易な単位認定・卒業認定
 - ②学習活動・学習量への不安
 - ③サポート校などに見られる安易な勧誘
 - ④都道府県協会のルールを無視した募集活動
2. 教職員全般の反発
 - ①上記の通り
 - ②かっちりとした教育課程・教育活動から見た通信制への不透明性
 - ③他の生徒への影響

全日制とのコラボレーションの現状

1. 科目履修による単位認定
本校が単位認定
本校の科目履修生として、在籍高校の教育課程の科目を学習する。
修得した単位は在籍高校の卒業単位数に含める。
2. 学習教材の提供
本校は単位認定に関わらない
在籍高校の別室登校や自宅学習で本校の教材を活用。

全日制とのコラボレーションの現状

1. 科目履修による単位認定
年間3～5名が登録。
少ない人数ではあるが、ここ5年間、継続して登録者がいる。
2. 学習教材の提供
開始は平成24年度
登録の状況推移



考察

通信制の根幹である自学自習の再構築
自学自習しやすい教材の研究開発
自学自習しやすい環境を整える

生徒：入学した高校を卒業したという達成感
商業リズムにのっていないため反発がない
→高等学校の学力の保障

全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と
全通併修についての調査研究
(第4分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

通信制高校の現状

1-① 通信制高校の成り立ちから その1

- ・ 1948年（S23年） 学校教育法施行
→通信教育は国語のみ。全日制・定時制の一部
- ・ 1955年（S30年） 高校通信教育の拡充
→通信教育のみによる高校卒業を可能とした
- ・ 1956年（S31年） 高等学校通信教育規程施行
- ・ 1961年（S36年） 学校教育法改正
→通信制課程のみの独立校設置
→広域通信制課程の設置

通信制高校の現状

1-① 通信制高校の成り立ちから その2

- ・ 1962年（S37年） 学校教育法改正
→技能教育施設制度の創設
- ・ 1989年（H01年） 学校教育法改正
→技能教育施設の指定を文部大臣から都道府県教育委員会へ
- ・ 2003年（H15年） 構造改革特別区域法
→株式会社立学校の制度化

通信制高校の現状

1-② 通信制高校の在籍生徒数から

①公立高校	76校	59,718名
②私立高校	171校	122,875名
合計	247校	182,593名

全国の高等学校在籍者数はここ
10年で約24万人の減少

通信制高校在籍者数はここ10年横ばい状態

通信制高校の現状

- ・ 2005年（H17） 公立と私立の生徒数が逆転
- ・ 2002年（H14）以降、2009年（H21）まで私立は毎年10校ペースで増加し、2017年（H29）までに147校の増加となった

特徴①技能連携校やサポート校が独立

特徴②全日制高校が通信制課程を設置

2018年（H30）滋慶学園が岡山県に新規開校

通信制高校の現状

2 通信制高校の問題点①

①公立

- ・ 硬直化したカリキュラムから抜け出せず、通信制に在籍する生徒に実態に対応しきれていない
- ・ ローテーション化した転勤システムにより、ひとつの高校（課程）としての基礎が築けない
→「制度」をベースとせざるを得ず、カリキュラムのみならず、教育活動も硬直化しており、多様な教育ニーズに対応できない
- ・ 独立校が増えたが従来のシステムから抜け出せず、特色を生かし切れていない

通信制高校の現状

2 通信制高校の問題点②

②私立

- ・教育活動の中心がサポート校等にあり、「学校」としては問題のある環境下で教育活動が行われている
 - 繁華街の一角にあるビルの一室
 - 書道教室がそのまま、広域通信制高校の看板を掲げている
- ・教育の質が十分に確保、担保されていない
 - テーマパークの買い物か「数学」のスクーリング
 - 報告課題や試験が○×形式のみ
- ・高額な保護者負担
 - サポート校、通信制で、年間150万円を超える費用
 - 入学案内等に掲載されない費用

通信制高校の現状

2 通信制高校の問題点③

諸々の問題点を抱えながらも通信制高校に対するニーズが現実として存在している
→社会に出るためには「高卒」が必要
→だから、「劣悪」、「高額」でも選択せざるを得ない
→しかしながら、「教育」が成立していない

通信制高校の現状

3 通信制高校の問題点に対する行政の対応

- ・2016年（H28）
「広域通信制高校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議」を発足させる
- ・同年9月30日付
「高等学校通信教育の質の確保・向上のためのガイドラインの策定について」を通知する
 - 「通知」の骨子
 - 技能連携校、サポート校等との渾然一体とした教育活動、募集活動を規制
 - 適切なスクーリング実施施設 スクーリングや添削指導、試験を通信制高校が行い、かつ、管理監督下に置くこと

通信制高校の現状

4 科技高が目指す通信制の姿①

多くの通信制高校が進学を「売り」にしている
→通信制の教育をどのように考えるか？
→通信制高校で高度な進学を目指すか？

通信制の特長は？

- ①やりたい勉強に傾注できる
 - ②一斉授業ではなく、個別対応が可能
 - カスタマイズ可能なカリキュラムや授業内容
- ★これらが通信制のよいところ！！

かぎこうは現在、改革の途上

通信制高校の現状

4 科技高が目指す通信制の姿②

かぎこうは「技能連携教育」のために設立された

連携生に対する普通科目の教育を提供
→教材の充実
①レポート
②副教材
★各連携校のニーズに合わせた教材の提供

かぎこうは現在、改革の途上

通信制高校の現状

全日制において学習の継続が困難な生徒に対する
学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究
(第4分科会)

ご清聴ありがとうございました

最後にもう一度・・・ かぎこうは現在、改革の途上

会議名	第14回 多様な学習支援事業に関する検討会議
開催日時	平成29年12月20日(水) 14:00~16:00
場所	科学技術学園高等学校 C棟 会議室
出席者	別紙資料
議題等	<p>1.各校より報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ①湘南芽吹高等学院 ②駿河学院専門学校 ③清水学院高等専修学校 ④科学技術学園高等学校 <p>2.各校 教材紹介</p> <p>3.教科別協議</p> <ul style="list-style-type: none"> ①数学 ②英語 ③国語

平成29年度 総合基礎A

目的

- (1) 学習意欲の回復とともに英語・数学の基礎学力の定着を図る
⇒ くりかえし学習
- (2) 生徒一人ひとりの学習形態・方法の模索
⇒ アドバイスの必要があれば、一斉授業展開
- (3) 教科横断的な学習課題の作成と実践
⇒ 各学年で試行錯誤的に実施

実験段階で2年間
この3年間かけて

今年度一つの学習形態を確立

- (1) 学習意欲の回復とともに英語・数学の基礎学力の定着を図る
⇒ コースを自ら選び、自ら学習教材を選ぶ
基礎的レベルのコースはTTを実践
- (2) 生徒一人ひとりの学習形態・方法の模索
⇒ 担任との面談の徹底化と目標設定
- (3) 教科横断的な学習課題の作成と実践
⇒ 総合基礎HR・CATにおける教材作成

総合基礎Aの構成 (5単位)

1. 総合基礎 数学・英語 3単位
2. 総合基礎CAT 1単位
3. 総合基礎HR 1単位

1学年の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目 ～ 6時間目	コミュニケーション	EC-I	国際総合	科学と人間生活	総合基礎 学習HR
	日本史A	看護I	社会と情報	国際総合	EC-I
	英語 (英語・音楽)	日本史A	別選	社会と情報	コミュニケーション 英語
	英語 (英語・音楽)	国際総合	国際総合	総合基礎 CAT	数学I
	EC-I	総合基礎 英語	数学I	数学I	科学と人間生活
	体育	総合基礎 数学	体育	総合基礎 数学	LHR

4月オリエンテーション 到達度試験 数学

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
足し算	引き算	かけ算	わり算	四則計算	小数の加法・減法	小数の加法・減法	分数の加法・減法	分数の加法・減法	正負の数の加法・減法	正負の数の加法・減法	異なる数の計算	いろいろな計算	展開式の乗法・除法	展開式の混合計算	同類項の整理	分配法則	乗法公式	差四角分解	共通因数分解	因数分解	「 f を含む式の乗法・除法				

自分の位置を確認

4月
到達度別テスト
基礎力診断テスト
散歩など

4月オリエンテーション 到達度試験 英語

動詞	S・V・H	進行形	助動詞	動名詞	不定詞
be動詞(G・S)	疑問詞を導くか作文	文の形	助動詞の位置	意味と種類	不定詞動名詞の使い分け
be動詞(一般動詞)	文を文法理解	動詞と形			作文
be動詞(動詞)	文を文法理解				
be動詞(動詞)	文を文法理解				
be動詞(動詞)	文を文法理解				
be動詞(動詞)	文を文法理解				
be動詞(動詞)	文を文法理解				
be動詞(動詞)	文を文法理解				
be動詞(動詞)	文を文法理解				
be動詞(動詞)	文を文法理解				



1. 総合基礎英語と数学

2クラス (70名) を3クラスに分ける

BASICT・T 教員2人

STANDARD

CHALLENGE

クラス分け

自分で行きたいコースを選択

2. CAT

Computerized Adaptive Testing
(コンピュータ適応型テスト)

パソコン室102・105教室

語彙クイズ



読解表現・音声による英会話



- CAT
- 教材は教科横断的、または日常生活からフィードバックした内容
- e-ライブラリー (コンピュータ教材)

チームティーチング

生徒との担任による個別面談

総合基礎 CATの学習教材

※別冊には1冊以内の学習教材です。テスト形式で学習を促します。
※別冊以外の学習教材も活用されています。

教科	学年	教材名
総合基礎	1年生	総合基礎A1
総合基礎	1年生	総合基礎A2
総合基礎	1年生	総合基礎A3
総合基礎	1年生	総合基礎A4
総合基礎	1年生	総合基礎A5
総合基礎	1年生	総合基礎A6
総合基礎	1年生	総合基礎A7
総合基礎	1年生	総合基礎A8
総合基礎	1年生	総合基礎A9
総合基礎	1年生	総合基礎A10
総合基礎	1年生	総合基礎A11
総合基礎	1年生	総合基礎A12
総合基礎	1年生	総合基礎A13
総合基礎	1年生	総合基礎A14
総合基礎	1年生	総合基礎A15
総合基礎	1年生	総合基礎A16
総合基礎	1年生	総合基礎A17
総合基礎	1年生	総合基礎A18
総合基礎	1年生	総合基礎A19
総合基礎	1年生	総合基礎A20
総合基礎	1年生	総合基礎A21
総合基礎	1年生	総合基礎A22
総合基礎	1年生	総合基礎A23
総合基礎	1年生	総合基礎A24
総合基礎	1年生	総合基礎A25
総合基礎	1年生	総合基礎A26
総合基礎	1年生	総合基礎A27
総合基礎	1年生	総合基礎A28
総合基礎	1年生	総合基礎A29
総合基礎	1年生	総合基礎A30
総合基礎	1年生	総合基礎A31
総合基礎	1年生	総合基礎A32
総合基礎	1年生	総合基礎A33
総合基礎	1年生	総合基礎A34
総合基礎	1年生	総合基礎A35
総合基礎	1年生	総合基礎A36
総合基礎	1年生	総合基礎A37
総合基礎	1年生	総合基礎A38
総合基礎	1年生	総合基礎A39
総合基礎	1年生	総合基礎A40
総合基礎	1年生	総合基礎A41
総合基礎	1年生	総合基礎A42
総合基礎	1年生	総合基礎A43
総合基礎	1年生	総合基礎A44
総合基礎	1年生	総合基礎A45
総合基礎	1年生	総合基礎A46
総合基礎	1年生	総合基礎A47
総合基礎	1年生	総合基礎A48
総合基礎	1年生	総合基礎A49
総合基礎	1年生	総合基礎A50
総合基礎	1年生	総合基礎A51
総合基礎	1年生	総合基礎A52
総合基礎	1年生	総合基礎A53
総合基礎	1年生	総合基礎A54
総合基礎	1年生	総合基礎A55
総合基礎	1年生	総合基礎A56
総合基礎	1年生	総合基礎A57
総合基礎	1年生	総合基礎A58
総合基礎	1年生	総合基礎A59
総合基礎	1年生	総合基礎A60
総合基礎	1年生	総合基礎A61
総合基礎	1年生	総合基礎A62
総合基礎	1年生	総合基礎A63
総合基礎	1年生	総合基礎A64
総合基礎	1年生	総合基礎A65
総合基礎	1年生	総合基礎A66
総合基礎	1年生	総合基礎A67
総合基礎	1年生	総合基礎A68
総合基礎	1年生	総合基礎A69
総合基礎	1年生	総合基礎A70
総合基礎	1年生	総合基礎A71
総合基礎	1年生	総合基礎A72
総合基礎	1年生	総合基礎A73
総合基礎	1年生	総合基礎A74
総合基礎	1年生	総合基礎A75
総合基礎	1年生	総合基礎A76
総合基礎	1年生	総合基礎A77
総合基礎	1年生	総合基礎A78
総合基礎	1年生	総合基礎A79
総合基礎	1年生	総合基礎A80
総合基礎	1年生	総合基礎A81
総合基礎	1年生	総合基礎A82
総合基礎	1年生	総合基礎A83
総合基礎	1年生	総合基礎A84
総合基礎	1年生	総合基礎A85
総合基礎	1年生	総合基礎A86
総合基礎	1年生	総合基礎A87
総合基礎	1年生	総合基礎A88
総合基礎	1年生	総合基礎A89
総合基礎	1年生	総合基礎A90
総合基礎	1年生	総合基礎A91
総合基礎	1年生	総合基礎A92
総合基礎	1年生	総合基礎A93
総合基礎	1年生	総合基礎A94
総合基礎	1年生	総合基礎A95
総合基礎	1年生	総合基礎A96
総合基礎	1年生	総合基礎A97
総合基礎	1年生	総合基礎A98
総合基礎	1年生	総合基礎A99
総合基礎	1年生	総合基礎A100

3. 総合基礎HR T・T 教員2人

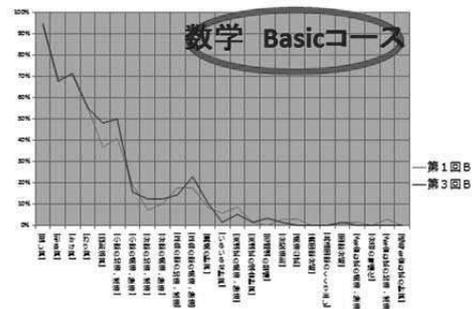
■教材に取り組ませておき、個別面談を強化・実施

■教材は教科横断的、または日常生活からフィードバックした内容

クラス分け

平成28年度1年生学習到達度[%]
(数学)

	第1回 4月	第3回 3月
チャレンジクラス	67	73
スタンダードクラス	40	47
ベーシッククラス	19	20



平成28年度1年生学習到達度[%]
(英語)

	第1回	第3回
チャレンジクラス	45	51
スタンダードクラス	30	34
ベーシッククラス	15	28

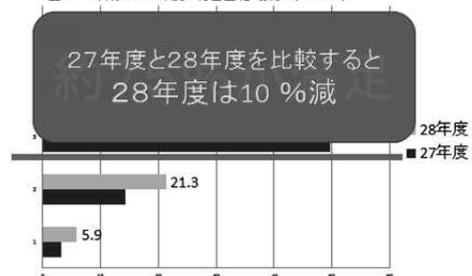
Q 1年間を終えて感想を聞かせてください。

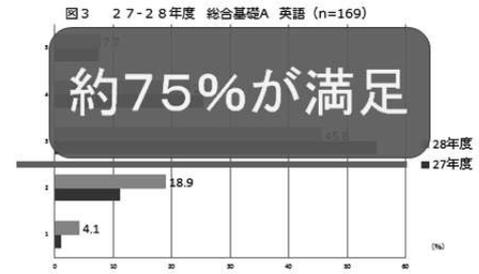
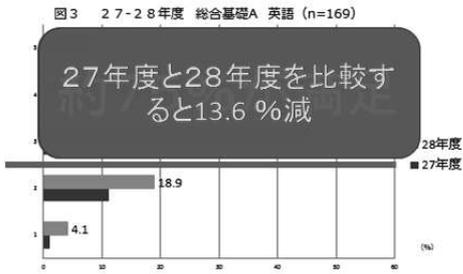
- 5 学習に興味をわき、さらに高いレベルのものをやりたいと思う。
- 4 自分で選んだ教材(プリント・Eライブラリー・CAT)を、無理なく楽しめている。
- 3 普段の授業よりも、何となく取り組みやすい。
- 2 何かやらなければならないので、一応やっている。
- 1 何のためにやっているのか、わからない。

図1 平成27-28年度 総合基礎A CAT (n=169)



図2 平成27-28年度 総合基礎A数学 (n=169)





問題点 不満に対する対応

- 「回答2 一斉授業がいい (英語18.9%、数学21.3%)」
- 「回答1 何のためにやっているかわからない (英語4.1%、数学5.9%)」

20~25%の不満足層への対応

29年度

- ① 受け身の生徒がいる中で自ら学習に取り組む生徒を増やすための方法を常に考えなければならない。
- ② 教材プリントに関して工夫し、質と幅増やしていく
- ③ 1学年と英語・数学の担当と顔を合わせてミーティングを持ち、対策を重ねること



本校生徒のタイプ

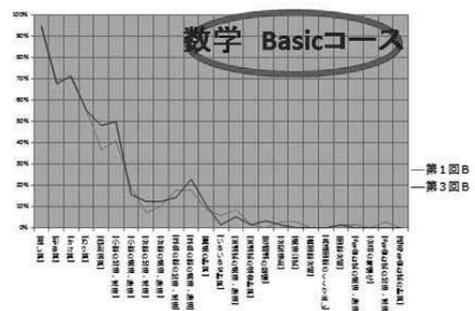
タイプA … 基礎的な事項を理解して学習面で伸びる可能性を持っている生徒

タイプB … 本校の中では比較的活発な生徒で、生活面でいい指導が必要な生徒

タイプC … 不登校経験のある生徒やコミュニケーションが苦手な生徒など、精神面でいい指導が必要な生徒

総合基礎34

学習に前向きでない層はBasicクラスに偏る



Basicの学習到達度では数学ではアップ率が少なかった(ほぼ0)にもかかわらず..

Q 特にわかりやすかった授業は何ですか？

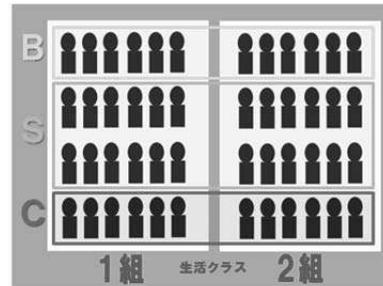
A 学習の遅れが目立つクラスX組の中のBasicクラスの生徒は16名中8名が「わかりやすい」

X組の感想のほとんどは、

- 進み方がゆっくりだから
- 丁寧に教えてくれる
- 優しい

B層について 調査を重ねていく

■生活クラスと学習クラス



報道情報 朝日新聞 朝日新聞 朝日新聞



1年 組 氏名

成城に「ゴジラ大壁画」

■ 科学者のそばにある「ゴジラ」の大壁画を見たことがありますか。この壁画は1954年に誕生し、これまでに国内で28作品が作られた「ゴジラ」の主題60周年記念プロジェクトの一環として制作されたものです。
 ■ 大壁画は、2004年のゴジラ FINAL WARS以来10年ぶりのゴジラシリーズ最新作、ハリウッド版(GODZILLA)が国内で公開されるタイミングに合わせて披露されました。
 ■ 大壁画が描かれているのは、東宝スタジオ第5ステージの西壁面です。ここに描かれたわけは、ゴジラは60年前この東宝スタジオ(かつては東宝撮影所)で誕生したからです。ゴジラは、成城生まれなのです。
 ■ ハリウッド版(GODZILLA)「ゴジラ」の公開日、5月26日の朝刊にこんな記事が載っていました。*

Q. 1 今回の記事「戦争・原発 ゴジラの警告」を読んで、文の中で読めない漢字の読みを調べ「読みメモ」をつくらう。「読みメモ」ができたら、文を出して読んでみよう。

読みメモ

Q. 3 今回の記事「戦争・原発 ゴジラの警告」に出てきた歴史用語を調べてみよう。

- ① 第五福竜丸事件は映画。
- ② 高度経済成長期は映画。

Q. 4 今回の記事「戦争・原発 ゴジラの警告」を読んで、次の○に答えてみよう。

総合基礎 CATの学習教材

- ◆ 英語CATはパソコンを用いた学習教材です。テスト形式で学習を進めます。
- ◆ 英語以外の学習も積極的に学んでいます。

		タイトル
国語的学習	シリーズ1	漢字を楽しくもう1
	シリーズ2	漢字を楽しくもう2ー漢字を探そうー
	シリーズ3	漢字を楽しくもう3ー漢字を紹介しようー
	シリーズ4	漢文字を楽しくもう1
	シリーズ5	漢字パズル
	シリーズ6	象形文字と会意文字
	シリーズ7	やまとことばクイズ
	シリーズ8	新語表現 その巻、其
241-70	1000枚収録ー1冊収録	

数学的学習	シリーズ9	50問問題に挑戦
	シリーズ1	数を使った体の体積「タンパズル」
	シリーズ2	数を使った体の体積「タンパズル」
歴史公民的学習	シリーズ1	My(NAVER) My(BLOG) 導入編・作業編(1~4)
	シリーズ2	新聞記事を読み解こう「バリ同時テロ」
	シリーズ3	新聞記事を読み解こう「農業人口減」
	シリーズ4	英語で歴史を知る1「国立西洋美術館本館」
	シリーズ5	英語で歴史を知る2「琉球王国」
	シリーズ6	英語で歴史を知る3「古代エジプト」
理科的学習	シリーズ7	英語で歴史を知る4「三国時代」
	シリーズ1	身体の不思議について「人間はどこまで潜れるか？」
	シリーズ2	身体の不思議について「鳥肌プツプツの正体は何か？」
保健体育	シリーズ1	筋肉とトレーニング
	241-70	1冊収録ー1冊収録

科学技術学園高等学校通信制課程について

平成29年12月16日(土)

通信制高校の現状

1-① 通信制高校の成り立ちから その1

- ・1948年(S23年) 学校教育法施行
→通信教育は国語のみ。全日制・定時制の一部
- ・1955年(S30年) 高校通信教育の拡充
→通信教育のみによる高校卒業を可能とした
- ・1956年(S31年) 高等学校通信教育規程施行
- ・1961年(S36年) 学校教育法改正
→通信制課程のみの独立校設置
→広域通信制課程の設置

通信制高校の現状

1-① 通信制高校の成り立ちから その2

- ・1962年(S37年) 学校教育法改正
→技能教育施設制度の創設 かぎこう開校
- ・1989年(H01年) 学校教育法改正
→技能教育施設の指定を文部大臣から都道府県教育委員会へ
- ・2003年(H15年) 構造改革特別区域法
→株式会社立学校の制度化

通信制高校の現状

1-② 通信制高校の在籍生徒数から

①公立高校	76校	59,718名
②私立高校	171校	122,875名
合計	247校	182,593名

全国の高等学校在籍者数はここ
10年で約24万人の減少

通信制高校在籍者数はここ10年横ばい状態

通信制高校の現状

- ・2005年(H17) 公立と私立の生徒数が逆転
- ・2002年(H14)以降、2009年(H21)まで私立は毎年10校ペースで増加し、2017年(H29)までに147校の増加となった

特徴①技能連携校やサポート校が独立

特徴②全日制高校が通信制課程を設置

2018年(H30) 滋慶学園が岡山県に新規開校

通信制高校の現状

2 通信制高校の問題点①

①公立

- ・硬直化したカリキュラムから抜け出せず、通信制に在籍する生徒に実態に対応しきれていない
- ・ローテーション化した転動システムにより、ひとつの高校(課程)としての基礎が築けない
→「制度」をベースとせざるを得ず、カリキュラムのみならず、教育活動も硬直化しており、多様な教育ニーズに対応できない
- ・独立校が増えたが従来のシステムから抜け出せず、特色を生かし切れていない

通信制高校の現状

2 通信制高校の問題点②

②私立

- ・教育活動の中心がサポート校等にあり、「学校」としては問題のある環境下で教育活動が行われている
→繁華街の一角にあるビルの一室
→書道教室がそのまま、広域通信制高校の看板を掲げている
- ・教育の質が十分に確保、担保されていない
→テーマパークの買物袋が「数学」のスクーリング
→報告課題や試験が○×形式のみ
- ・高額の手続き負担
→サポート校、通信制で、年間150万円を超える費用
→入学案内等に掲載されない費用

通信制高校の現状

2 通信制高校の問題点③

諸々の問題点を抱えながらも通信制高校に対するニーズが現実として存在している
→社会に出るためには「高卒」が必要
→だから、「劣悪」、「高額」でも選択せざるを得ない
→しかしながら、「教育」が成立していない

通信制高校の現状

3 通信制高校の問題点に対する行政の対応

- ・2016年（H28）
「広域通信制高校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議」を発足させる
- ・同年9月30日付
「高等学校通信教育の質の確保・向上のためのガイドラインの策定について」を通知する
→「通知」の骨子
 - 技能連携校、サポート校等との渾然一体とした教育活動、募集活動を規制
 - 適切なスクーリング実施施設 スクーリングや添削指導、試験を通信制高校が行い、かつ、管理監督下に置くこと

通信制高校の現状

4 科技高が目指す通信制の姿①

- 多くの通信制高校が進学を「売り」にしている
→通信制の教育をどのように考えるか？
→通信制高校で高度な進学を目指すか？

通信制の特長は？

- ①やりたい勉強に傾注できる
 - ②一斉授業ではなく、個別対応が可能
→カスタマイズ可能なカリキュラムや授業内容
- ★これらが通信制のよいところ！！

かぎこは現在、改革の途上

通信制高校の現状

4 科技高が目指す通信制の姿②

かぎこは「技能連携教育」のために設立された

連携生に対する普通科目の教育を提供

→教材の充実

①レポート

②副教材

★各連携校のニーズに合わせた教材の提供

かぎこは現在、改革の途上

特別に支援を要する生徒への 学習教材の開発 (第2分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

「基礎学力クラス」設置の背景

- ・中学校までで養成されるはずの学習成果が
“虫食い”状態の生徒(要因は様々)
- 高等学校の学習を積み上げられない



「学び直し」の場を提供

クラス開始の動機

本校通信制課程において、学習が遅滞して
いる生徒・登校頻度の低い生徒が散見

- 原因を把握すべく面談を実施し、各々の
実情にあわせた学習活動の提示

基礎学力クラスの現状

No.	氏名	年次	科目	進捗	実務	他科目
1	N君	2	漢字の 書き取り	計算ドリル STEP4		地理A (数時)
2	O君	2		STEP1		
3	H君	2		STEP2		
4	Tさん	1		STEP3	基礎英語	
5	Oさん	3		STEP3		

火曜日	地理A	単位修得に向けて、レポートの作成に取り進んでいる
木曜日	計算	段階別ドリルに取り進んでいる
木曜日	英語	基礎部分(be動詞等)から学習を始めている
土曜日	漢字	書く方に注力し、毎日確認小テストを実施している

- 学習の進捗・内容は生徒に合わせる
(寺子屋方式 → 個別指導)

◆ 使用中の教材

国語：「書き取り散歩 8~7級」
→漢検を意識した読み書きテキスト

算数：「基礎計算ドリル」
→STEP1：四則演算
STEP2：小数の計算
STEP3：分数の計算
STEP4：図形・立体等の計算

英語：「総合基礎(英語)」
→英検5級相当から用意されたテキスト

基礎学力クラス 実践例①

事例：N君の場合

…入学後、単位の修得ができず休学
「勉強についていけない」ことで学校から足が遠のいていた

前期：4月から学習を開始(計算のみ)

- 登校・学習の習慣が定着してきている

後期：国語・地理Aの学習も追加

- 家庭での生活面でも改善がみられる
学習に対して積極的な姿勢・言動が見られる

基礎学力クラス 実践例②

事例：H君の場合

…スクーリングへの出席はあるが、レポートの作成がままならず、単位修得につながらない

後期：10月から個別学習を開始

- レポート作成をサポートしつつ、苦手な数学
(算数)はSTEP2からスタート

基礎学力クラス 実践例③

事例：Tさんの場合

…高校入学に際して英語の学習に対する不安があり、基礎からの学び直しを希望

後期：11月から個別学習を開始

- 基礎試験の後、本校の教材を使用して動詞の単元から学習をはじめる

通信制を特別に必要とする 生徒について (第3分科会)

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

社会における現状

自らの意志で通信制高校へ入学している生徒

クラシックバレエ	テニス
サッカー	ゴルフ 芸能関係 等

→目的に対する練習時間を作るため

「通常の高校では達成できない目的を持った生徒への学習支援についての調査・研究」を行う

本校生徒の調査

個人生として学習している生徒

クラシックバレエ、テニス、芸能、 専門学校、美容教育、 ペット・トリマー
--

今回はモデルケースとして、クラシックバレエの活動をする生徒への支援について考えていくこととした。

学習支援の検討

普通科目に対する学習姿勢の改善

・自分の専門とする分野のエキスパートになるためにはその分野以外の科目は単に単位を修得すればいいという考え（高卒の資格取得のため）



普通科目の教材開発 → 幅広い知識を身に付ける



エキスパートになるための教養を養う

普通科目の教材の研究・開発の推進

学習支援の検討

バレエ研修所の生徒について検討してきた内容

・どのような学習支援ができるのか

これから開講できると考えられる科目

教養を身に付けさせる…健康管理
☆栄養学

栄養学の学習教材の提供

栄養学実践報告

日時：平成28年5月18日（水）10：00～16：00

場所：講義 309教室 実習：家庭科室

講義内容：栄養素の種類とはたらき
食品群別摂取量のめやす

食品群別摂取量のめやすで自分の一日に
摂取しなければならない食品の量を確認



実習で確認

栄養学実践報告

実習内容：一日の献立の立て方

実習内容：一日の献立の立て方
講義で学習したことをもとに
実際に調理を行う

実習後に朝食、昼食、夕食に分けてセッティングし、目でみて確認できる内容とした



栄養学実践報告



朝食：白飯 豚汁
納豆（生卵入り）
キャベツの甘酢漬け
牛乳

朝食：奥だくさん炊き込みご飯
野菜スティック パナナ
プチトマト トマトジュース
魚肉ソーセージ



レッスンの会場
でも食べやすい
食事



朝食：白飯 カレースープ
鮭ときのこのホイル焼き
小松菜のおひたし

現在、実践中のもの

美容学校における国家試験対策

美容師国家試験科目 → 衛生管理

科技高提供教材

国家試験合格と学び直しを両立

会議名	第15回 多様な学習支援事業に関する検討会議
開催日時	平成30年1月19日(金) 14:00~16:00
場所	科学技術学園高等学校 C棟 会議室
出席者	別紙資料
議題等	<p>1.第1第2第3第4分科会研究報告 豊島教務主幹、高橋(佳)教諭 津島教務主幹、松田通信制課程教頭</p> <p>2.指導助言 外部委員</p> <p>3.講演 デンソー技研センター 安部工師 ー世界に貢献する人材の育成を目指してー (将来誰が活躍するか分からない人材育成)</p>

学習意欲の回復について

科学技術学園高等学校 第1分科会

現在の昼間定時制課程における問題点

「学習が遅れがちな生徒」が、安心して安全な学校生活を送りながら、「学習をやり直してできる学校」という評価

問題点

入学当初は様々な活動に意欲的に取り組む
→ 学校生活の慣れから、次第に積極的に取り組む意欲が減少する様子が見られる生徒が出てくる
→ 特に授業、学習活動に対する意欲の減少

I 目的

①本校昼間定時制課程が今まで積み重ねてきた経験と指導方法を基にして、

「学習意欲の回復」プログラム

の研究・開発に取り組む。

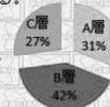
②実践の場において、現在の指導方法を検証しプログラムを新しく構築していく。

II 現状報告 本校の生徒層

A層 ・公立高校入学できるかの合否ボーダーラインに位置する。
・他者との円滑なコミュニケーションがとれる。
・学習、学校生活に意欲的である。

B層 ・生活面で多少の生徒指導を要する場合もある。
・学習を始め学校生活において、意欲の減少等が見られる。

C層 ・学習に真面目に取り組むが、他者とのコミュニケーションが苦手である。
・生活上なにかしらのサポートが必要である。



各生徒層と学習意欲

各層の共通点

中学までの義務教育の中で、入学時は学習意欲を失いかけている

A層・C層

→ 習熟度別授業などの取り組みで学習意欲を回復していく

B層

→ 学年が進むにつれ、徐々に学習意欲を失う

B層に属する生徒へのアプローチ

学習意欲を失い、手厚い指導が必要となるグループ

B層 生徒の学習意欲を向上させるには

授業の工夫だけでなく、「授業以外の教育活動を通して、学校での居場所を作ることにより、学習の意欲の回復につなげていく」

I-1. 平成27年度 活動報告(1)

H27 8.5

定時制課程について— 一定時制課程の生徒像—

- ① 生徒募集活動における5つの柱
- ② 学習に関する意識調査(1年生)
- ③ 入学生の学力
- ④ 本校生徒のタイプ分け

I-1. 平成27年度 活動報告(2)

H27 11.9

「学習に対する意欲を回復」させるための取り組み

- ① 教材・教具の工夫 —タブレット端末—
- ② 学校内活動の再確認(4分野11項目)

授業以外の教育活動全般を通して学習意欲の回復につなげていく

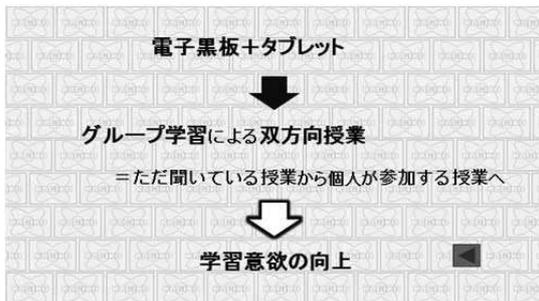
I-1. 平成27年度 活動報告(3)

H27 12.18

研究授業

- ① タブレットと電子黒板を組み合わせた、数名のグループ学習による双方向授業の実践(数学科)
- ② 生徒の興味・関心を高める授業の工夫(理科)





- 学校内活動⇒ 授業以外の教育活動
- 学校内の活動を4分野、11項目に区分し、項目ごとに調査・研究する
- 【課外活動】 ■生徒会 ■委員会 ■部活動・同好会 ■習い事クラブ
 - 【行事関連】 ■修学旅行 ■文化祭・体育祭 ■その他学校行事
 - 【学習関連】 ■HR・SHR ■休み時間 ■評価・試験・模擬試験・検定試験 ■家庭学習 ■長期休暇 ■校外学習
 - 【進路関連】 ■進路指導

I-1. 平成27年度 活動報告(4) H28 2.26

学習意欲の回復に向けて

- ①少人数または個別での学習活動及び課外活動の実践
- ②次年度実施項目とその課題・問題点

I-2. 平成28年度 活動報告(1) H29 3.4

学校生活全般を通して生徒に意欲を持たせるための項目の実践及び検討

①「習い事クラブ」

少人数指導で特化した能力を育てる習い事クラブを増やし、活性化させる。

- ・「英語クラブ」→英語検定準1級合格(H28 10)
- ・「パソコンクラブ」→H29 10月開設予定

I-2. 平成28年度 活動報告(2) H29 3.4

②「学校行事」 H29 3.4

体育祭、文化祭、修学旅行などの行事について、準備段階から生徒グループにコミットさせ、自分たちの行事だという意識を強め主体的に取り組ませる。

・「行事の在り方について一生徒の主体性を大切にした体育祭」



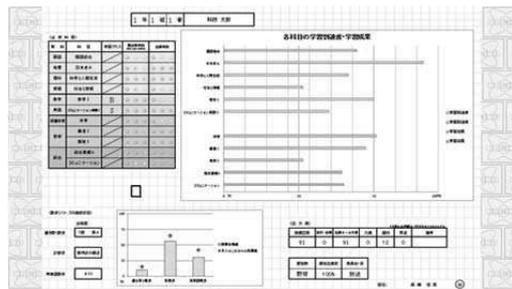
① 平和祈念公園・ 沖縄県平和 祈念資料館	② 基地のある日常 (普天間基地) について 嘉数高台公園 散策	③ 比地大滝 トレッキングツアー (2時間)	④ 伊江島民泊
⑤ マリンスポーツ 体験・ サンゴ再生 プロジェクト	⑥ マングローブ 観察&カヤック	⑦ 美ら海水族館	⑧ 琉球村 (沖縄テーマ パーク)
⑨ むら咲き村 (沖縄テーマ パーク)	⑩ おきなわワールド (沖縄テーマ パーク)	⑪ 那覇市内 タクシー研修	⑫ 道の駅かてな
⑬ 首里城	⑭ 今帰仁城跡	⑮ ガンガラーの 谷ツアー	⑯ 国際通り 別荘研修



I-2. 平成28年度 活動報告(3) H29 3.13

③評価方法の工夫

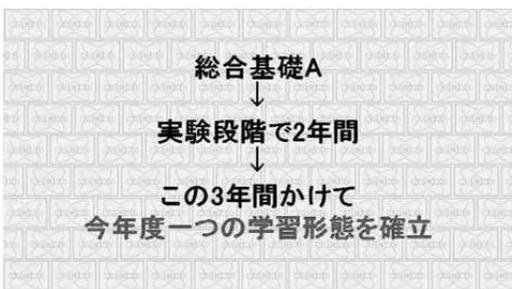
「やる気」を起こさせる評価方法、学習の成果や結果の伝え方について研究する。
前提として、定期試験のあり方、評価の仕方や成績の付け方等についても、併せて検討する。
・「学習意欲回復のための評価について」



I-2. 平成29年度 活動報告(1) H29 10.13

① 総合基礎A
少人数クラス 対応
自分でコースを決める
自分で科目を決める
自分でスタート地点を決める

② 29年度 修学旅行・文化祭・体育祭
28年度に続き報告



- (1) 学習意欲の回復とともに英語・数学の基礎学力の定着を図る
⇒ コースを自ら選び、自ら学習教材を選ぶ
基礎的レベルのコースはTTを実践
- (2) 生徒一人ひとりの学習形態・方法の模索
⇒ 到達度の明確化・担任との面談の徹底化と目標設定
- (3) 教科横断的な学習課題の作成と実践
⇒ 総合基礎HR・CATにおける教材作成



まとめ

教科書・
従来の評価、学習方法
行事の取り組み方

I-2. 平成28年度 活動報告(4)

④授業でのグループ学習

各教科において、授業内で5～6名のグループによるグループ学習を行う。
授業にはアシスタント教員を用い、きめ細かい指導を行う。
※昨年度は実施せず

II 2年間の活動のまとめ

(1)

×教科書の説明に重きを置く

↓
個々の到達目標・フィードバック

↓
「学習の楽しさ」・「学びの回復」

II 2年間の活動のまとめ

(2)学校生活全般を通じた生徒主体の活動
学校という生活空間

↓
「部活動」—自分の必要性・存在理由
「行事(体育祭・文化祭)」—自分の役割・協力
↓
学習面に発展させていく工夫

II 2年間の活動のまとめ

(3)教科間のコラボレーション

教科の枠に閉じ込めない

↓
他教科との連携(横断的学習)

↓
授業・行事等に取り入れる

III 今後の取り組み(「修得主義」の実践)

(1)「教科の枠を超えた横断的な学習」

・教科間での連携(コラボレーション)による授業展開を図る
(例)国語総合「りんごのほっぺ」
・原爆について
→地歴公民科「戦争」
→理科「原子力開発の仕組みと歴史」

III 今後の取り組み(「修得主義」の実践)

(2)「授業と行事の連携学習」

(例)修学旅行—沖縄コース—
→地歴公民科「米軍基地問題」
→理科「マングローブの生態」
→国語科「琉球方言」
など

III 今後の取り組み(「修得主義」の実践)

<最後に>

○「多角的・多面的な学習」

+

○「幅広い横断的な学習」

||

学習意欲の回復を図る

総合基礎Aの構成 (5単位)

1. 総合基礎 数学・英語 3単位
2. 総合基礎CAT 1単位
3. 総合基礎HR 1単位

1学年の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目～6時間目	コミュニケーション	EC-I	国語総合	科学と人間生活	総合基礎学習HR
	日本史A	普通I	社会と情報	国語総合	EC-I
	英語(英語・音楽)	日本史A	普通	社会と情報	コミュニケーション基礎
	英語(英語・音楽)	国語総合	国語総合	総合基礎CAT	数学I
EC-I	総合基礎英語	数学I	数学I	科学と人間生活	
体育	総合基礎数学	体育	総合基礎数学	LHR	

自分の位置を確認

4月
到達度別テスト
基礎力診断テスト
散歩など

4月オリエンテーション 到達度試験 数学

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
【実数】	【四則演算】	【わり算】	【四則演算】	【分数の加法・減法】	【分数の加法・減法】	【分数の加法・減法】	【正負の数】																	

4月オリエンテーション 到達度試験 英語

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
【英単語】																								



1. 総合基礎英語と数学
2クラス (70名) を3クラスに分ける

BASIC T・T 教員2人

STANDARD

CHALLENGE

クラス分け

自分で行きたいコースを選択

2. CAT
Computerized Adaptive Testing
(コンピュータ適応型テスト)

パソコン室102・105教室

語彙クイズ

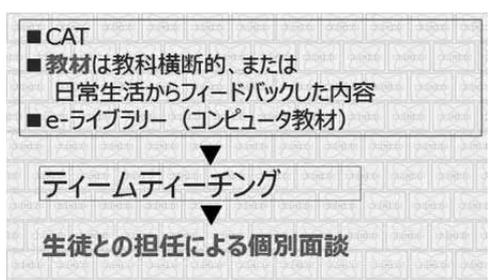
先「語い」を鍛える「語いクイズ」

1級レベル 大学上級程度：約15,000語レベル
準1級レベル 大学中級程度：約7,500語レベル
2級レベル 大学初級程度：約3,750語レベル
準2級レベル 高校中級程度：約1,875語レベル
3級レベル 高校初級程度：約937語レベル
4級レベル 中学中級程度：約469語レベル
5級レベル 中学初級程度：約235語レベル

読解表現・音声による英会話

先「読解表現」を鍛える「英検模試」

学習目的の読解表現を鍛えるには読解表現が最適です。読解表現は長文や短文の読解問題を基に作成されています。また、読解表現の学習で得られるので、英語に自信が持てるようになります。読解表現を鍛えることで、読解表現の学習が楽しくなります。また、読解表現を鍛えることで、読解表現の学習が楽しくなります。



特別に支援を要する生徒への 学習教材の開発 (第2分科会)

平成27～29年度活動報告

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

「基礎学力クラス」の生徒

- ・中学校までで養成されるはずの学習成果が
“虫食い”状態の生徒（要因は様々）
- 高等学校の学習を積み上げられない



「学び直し」の場を提供をスタートと
したが、「勉強」の「練習」から始める
必要があった

「基礎学力クラス」の生徒

※N君の例を抽出

- 「勉強の練習」は功を奏し、牛歩であるがステップ
アップがみられた
- 基礎学習を繰り返すことで、目標を見出せるようにな
り、英検、漢検にチャレンジするまでになった
- 学習活動以外にも、特活にも積極的に参加している

N君曰く・・・

- ①周囲から明るくなったと言われる。
- ②先生が一生懸命なので、それに応えないと。

結論として

中学新卒者で通信制高校に入学する生徒の中には
基礎学力が欠如しているというより、義務教育制
度の中で、居場所を提供されなかった、また、前
期中等教育までの段階で、当該の教育機関が対応
できなかった状況の生徒である。

これらの生徒に「寺子屋方式」の個別指導、対応
ができるのが、通信制高校である。

①個々の状況に応じた教材

②居場所

この2つの提供を軸に、「やる気」を喚起してい
くことが重要である。

→教員の「本気度」が大切である。

通信制を特別に必要とする 生徒について (第3分科会)

平成27～29年度 活動報告

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

1. 対象とした本校生徒

自らの意志で通信制高校へ入学している生徒

- ①新国立劇場バレエ研修所
- ②アトム湘南美容教育専門学校

いずれも自己の目的のため、全日制高校を
選択しなかった生徒

2. 展開した内容

①新国立劇場バレエ研修所

栄養学の開講

- 研修所の授業とタイアップし、教材作成
- 単位認定

②アトム湘南美容教育専門学校

国家試験対策も兼ねたレポートの作成

- 美容の物理・化学分野に対する教材作成
- アトム生に特化したレポート内容
- 提出義務のあるレポートとした

3. 結論

※生徒本来の目的と高校教育の融合は
教育効果、動機付けの面で非常に有効

- 今後も継続、研究が必要
- 特化した生徒の「発掘」、「創造」
- 通信制高校であるからできる

全日制において学習の継続が困難な生徒に対する 学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究

平成27～29年度 活動報告

科学技術学園高等学校

1.活動報告(1)

全通併修について

- ①全通併修の法的根拠
- ②他校での全通併修の実施例
- ③本校での全通併修の実施状況

1.活動報告(2)

全通併修制度を活用する生徒への対応例

- ①実施校に対して本校ができる学習支援の検討
- ②学校へ登校できるが教室へ入れない生徒への対応例
- ③学校へ登校できない生徒への対応例
- ④高校入学以前の学習に不安を持っている生徒への対応例
- ⑤新たな可能性の模索

1.活動報告(3)

全通併修制度の推進について

- ①全通併修制度の実情
- ②本校定時制課程での実践(定通併修)
- ③全通併修の実施例
- ④全通併修制度の問題点
- ⑤今後の研究課題

1.活動報告(4)

全日制高校からみた通信制高校 ～ある全日制高校との協議から～

※問題点となる事項

- ①学習量が少ない
- ②学習レベルが低い
- ③学習実態がわかりにくい

1.活動報告(5)

全日制高校からみた通信制高校 ～ある全日制高校との協議から～

3年生で出席が滞りがちになり、卒業要件を満たす
ことが危ぶまれる生徒が出た場合

出席不足により現在籍校での卒業が難しいとの通告

通信制高校もしくはサポート校
への転学を余儀なくされる。 → 入学した高校を卒業
したい、させたい

1.活動報告(6)

全日制高校からみた通信制高校
～ある全日制高校との協議から～

通信制高校ができること

※通信制独自の「学習書」の活用
本校で言えば、教材開発のノウハウを保持している

1.活動報告(7)

全日制高校からみた通信制高校
～ある全日制高校との協議から～

※本校の学習書

- ・各単元ごとのポイントを押さえたうえで問題を解く。
または発展的な調べ学習への導き
- ・英語については実用英語検定の各級に対応した教材。(検定対策としても利用可能)
- ・基礎・応用・発展の様々なレベル

1.活動報告(8)

活動を通しての結論

①高校卒業資格は与えられるが、根本的解決にはならない。

不登校状態を脱することにはつながりにくいし、
学習量を始めとする「学習の本来の意味」が欠落する。

②全日制高校や社会からの批判的な意見・考え

学習量と質の確保がこれらを払拭する方策
通信独自の「学習書」を活用することで解決の糸口とする



協力関係にある全日制高校と協議を続けながら、対象となる生徒に適切な教材を提供することが重要と考える

さらなる研究が必要

相手の幸せを願い、根気よく指導

デンソー技研センター 工師 安部良夫

初めに、多様な学習支援推進事業の委員として参加させて頂き、感謝申し上げます。

先生方の真剣さ、教育に対する熱い思いに私自身大変刺激を受けました。

教育の3要素である①教材 ②カリキュラム ③指導者 の中で、教育に一番影響を与えるのは“指導者”であり、今回の研究会を通じて、各先生方が益々指導力を高められたことは、大きな成果と感じます。色々な事情で学習に困っている生徒に、先生方の熱い思いは必ず届くと確信致します。

私自身過去を振り返ってみますと、熱心に教えて頂いた先生の顔が浮かび、今でもその先生の熱い思いを感じます。また、そういう先生が、授業の合間に話してくれた色々な雑談も授業内容以上にインパクトがあり、自分自身の考え方を固めていく、道しるべになった気がします。今思えば、先生方は、我々の将来を想定し、色々な事をお話頂いたのだと感謝しております。

従って、私達も生徒の幸せを願い、あらゆる機会を通じアドバイスを送る事が重要だと感じています。研究発表の中にもありましたが、指導はあくまで個人指導が中心であり、如何に相手を理解し、相手の将来を考えたアドバイスを送る事が出来るかだと感じます。

先生方が、機会あるごとに声掛けを行い、何気なく会話される中に、生徒は自身の気づきを見出し、“そうだ、こうしよう！”と決意が固まるのではないのでしょうか。生徒にとって、“私の幸せを願い、指導して下さる先生がいる”と感じられる事は、学習意欲を高めるだけでなく、私生活への支えにもつながり、自らの行動を見直し、新たな一歩にもつながるのでと感じます。

私自身、デンソー工業学園での教育を通じて、多くの卒業生を現場に送り出しましたが、卒業後の活躍状況は、人それぞれです。職場では、技術・技能を發揮し、仕事の成果を出す事は勿論ですが、“体を張って仕事を行う”“絶えず研究・工夫を行う”“難問にもベストで挑戦する”“仲間とのコミュニケーション・チームワークを大切にする”など、取り組み姿勢の方が優先し評価されます。

心身教育に関する評価の仕方は難しい面がありますが、学力重視だけでなく、心身教育を大切にし、指導を展開する事が若年者教育では重要と感じます。つまり、将来活躍する生徒は、成績優秀な生徒に限らず、色々問題を起こしたり、“やんちゃ”した生徒にも大いに期待できます。

会社生活では、職場経験を重ねていく内に、“専門技能發揮”からチームをまとめる“マネジメント力發揮”へと変化していきます。そうなると、仲間を思いやり、問題に対して自ら責任を取る親分肌のような人材が重宝され、現場リーダーとしてチームを(組織)を任されるようになります。『えっ、あいつが・・・』と言われる卒業生も現場を任せられ、立派な課長・工場長に成長しております。そういう卒業生を多く見てきただけに、指導者は、問題のある生徒に対しても決して諦めることなく、相手を信じて根気よく指導する事が重要だと感じています。あくまで指導は“明るく・優しく、そして厳しく”、悪い事は悪いとはっきり指摘し、相手を幸せに導きたいものです。

また、私は会社生活以外にも地元小学校の少年野球指導を28年間に渡りお手伝いしています。この活動は、私にとって“相手をやる気にさせる”人材育成手法を学ぶ貴重な場にもなっております。私自身は、28歳から草野球は始め、野球の基本技能や知識は殆ん

ど有りませんでした。お手伝いをする中で、どう教えたら子供たちの目が輝くかを課題に、色々な人から野球の手ほどきを教えて頂き、自分流の教え方を身に付けてきました。

現在は、4年生以下の指導を中心にお手伝いしていますが、野球指導と言うより、心身指導（躰）が中心となっています。勿論、練習では親御さんにも声掛けし、一緒に子供たちを見守って頂く様にしています。指導の基本は優しくですが、道具の扱い方、人の話を聴く態度、返事の仕方、仲間への声掛けなどが出来ない時は、厳しく接し、正さない場合、練習に参加させません。時々子供たちの涙をみますが、心を鬼にし『ちゃんとやります』と言うまで、練習に参加させません。親には、事情をお話しご協力・ご理解を頂いています。今まで親から『躰が悪く、申し訳ありません』の言葉は頂いても、苦情は聞いていません。逆に、少年野球以外の相談が個別にあり、色々対応した事もあります。少年野球指導は、野球技術や心身（躰）指導の場で有りますが、私にとっては“指導力向上への研究の場”となっております。

少年野球に入会する子供たちは、大半が野球が好きで加入してきますが、低学年から加入する子供たちは、約半分が親の都合で加入すると感じています。例えば、親が野球好きで子供にも体験させたい、昼間親が他の事をやりたい子供を預ける手段として加入させる、中には不登校だから仲間作りを考え加入させるといったケースもありました。

それだけに、加入当初は余り野球に興味がなく、親に無理やり連れられ練習参加する子も多くみられます。

従って、野球のレベルも様々であり、全くボールを受けられない子、バットがまともに振れない子、走る事が大嫌いな子、服を汚すことが嫌いな子など、保育園の園児を預かるような感じでスタートします。そんな中、私達には“どの様にスポーツの楽しさを教えていくか”が課題となります。

相手が低学年の子供達だけにやる気を引き出すのは大変ですが、最初は誉めることを重視し、友達と比較せず、その子の成長度合いに目を向けながら指導しています。そして、良い行動やプレーを行った時には、しっかり誉めてやり、一緒になって喜んでやります。例えば、一度もフライを受けられなかった子が突然キャッチした時、子供の所に駆け寄り、抱き上げながら『バンザーイ、バンザーイ』と声を出して胴上げをしながら誉めてやります。また暫くキャッチできませんが、子供たちは胴上げを期待し、徐々にボールに向かっていきます。（実はボールが怖い）。そして、勇気を出して再度キャッチできた時、今度は子供達の方から両手を上げ、私の方に走り寄ります。勿論『ヤッター、バンザーイ・バンザーイ』と胴上げしてやります。私自身が子供に戻った気がする一瞬でもあります。

こんな練習から、いやいや参加していた子供達も野球の楽しさを知り、練習を休むことなく参加する様になりました。指導には根気と時間がかかりますが、練習を重ねる毎にできなかった事が少しずつできるようになり、プレーも上達していきます。

練習を見に来た親御さんにも“1ヶ月前と比較し、どれだけ成長したか”など伝えるようにしています。最初泣きながら参加していた子供のお母さんから、『子供が練習が楽しみで、夜ユニフォームを着て寝ました』などとお礼を言われた事もあり、私もビックリすると共に大変嬉しく思いました。

以上、人材育成は、“相手の幸せを願い、根気よく指導”する事が重要であり、失敗や成功は有りますが、最後まで相手を信じ、諦めずに指導し続ける事だと感じます。

最後になりましたが、今回の先生方の研究成果が、他の先生方の指導の参考となり、新たな教育手法や教材開発を通じて、多様な学習支援推進の成果にもつながる事を期待致しております。

多様な学習支援に期待して

茅ヶ崎市立円蔵中学校長 井上登志子

この3年間、科技高の先生方が取り組まれてきたことは、「人を育てる」という教師としての使命感、情熱にあふれたものだったと思います。検討会議に毎回、参加できたわけではありませんが、参加するたびに先生方の生徒たちに対する熱い思い、生徒の学びを深めたい、力をつけさせたいという思いを強く感じました。その思いは義務教育最終段階の中学校でも全く同じです。

今、中学校現場ではインクルーシブな学校づくりに重きを置いて、日々の教育活動に取り組んでいます。全ての子どもが集団の中で安心して充実した学校生活を送れるようにすること、子どもたちの多様なニーズに柔軟に応じられる学校にすることを目指しています。とりわけ、わかる喜びや学ぶ楽しさを実感できる授業を提供することに力を入れています。その授業づくりでは見通しを持たせる工夫（学習目標や評価の提示、授業の流れの提示等）をしたり、時間の構造化（作業時間や終了時間を板書したり、タイマーを活用する等）を図ったり、教材の視覚化

（イラスト・写真の利用、実物投影機を使用する等の資料の提示等）をするなど、授業のユニバーサルデザイン化を進めています。また、個々の生徒に対する合理的配慮についても教科を超えて情報交換をし、指導法を共有するようにしています。もちろん支持的風土がなければ授業の中で自己肯定感、自尊感情を得ることはできませんので、学級が安心安全な居場所になるよう、そして行事や部活動の場も感動体験を得る場、自己肯定感を高める場となるよう創意工夫を図っています。新学習指導要領の先行実施も見通し、職員みんなで知恵を出し合い、授業力の向上を目指して努力していますが、手を差し伸べきれない、救いきれていない生徒が少なからず存するのが現実です。基礎学力が身につけていない生徒と一口に言っても、その原因は様々で、登校できている生徒もいれば不登校生徒もいます。中学時代は思春期真っ只中で、仲間とのちょっとした行き違いから教室に入れなくなったり、複雑な家庭環境の犠牲になって登校できなかつたり、あるいは本人の無気力・怠惰が原因だったりして学習の機会を逸してしまう生徒もいます。LD、ADHDといった障害を伴い、一対一対応でなければ難しい生徒など、タイプは様々で、そのすべてに100%対応する時間も人の配置もないのが現状です。

それでも中3になれば、子どもたちも保護者も進路のことを考え始めます。しかし、その時に選択できる道は悲しいかな、限られてしまいます。だから尚のこと、彼らは学び直したい、やり直したいという思いを強く持ち、新しいステージに進んでいきます。その意欲、思いが萎えてしまうことのないように、フォローしていただけるのが今回の科技高の取り組みだと思っています。実際、登校できるのか不安に思っていた生徒が、昼間定時制やサポート校に遠くてもきちんと通っていたり、そこでリーダー役を引き受けていたりして見違えるような活躍をしている場合もあります。そんな喜ばしい姿を見聞きすると、やはり子どもは変わりたいと思っているし、学びたいと思っているのだとつくづく感じます。その機をのがすことなく、しっかり受け止め、受け入れてくださる進路先が増えつつあることには感謝しています。しかし、その変わりたい、学び直したいという思いを長続きさせることが難しい子どもの方が多いようです。集団を学ぶ時期に学べないと将来の逸脱のリスクが上がるようです。その点、今回の科技高の取り組みのように、生徒のアンケート結果や生徒の実態を細かに分析され、行事のあり方を生徒主体に変更する等、学校全体の教育活動を見直されているところは、彼らの学校生活ひいては学習意欲を持続させるため

の大きな力になっていくと思います。

教室に存在する幾多の子に配慮しながら手立てを考えていくことは、かなり厳しいものがありますが、それぞれの生徒のその後の人生を充実したものにするためには、学び直しがどうしても必要ですし、それぞれのレベルに合わせた学習教材を用意したり、支援方法を工夫したりすることが求められます。千差万別なタイプの生徒に合わせていくためには、当然画一的なものでは対応できないわけで、子どもの状況をしっかり見取り、それぞれに合った学びの手段を用意していくことが欠かせません。科技高が研究されてきた<多様な学び>は、多くの生徒を救ってくれるものと信じています。

3年間にわたる先生方の地道な取り組みは、タブレット端末等の教材教具の開発もあれば、少人数学習、習熟度別学習といった学習形態、さらには評価方法の工夫や行事の見直しと、あらゆる方面から学習に困難を抱えている生徒の支援に迫っており、その点でも生徒により良い効果となって表れてくると期待しています。これからますます、個別のニーズに応じた教育活動が求められるであろうし、中高での個別支援計画の引き継ぎ等の連携も必要となってくると思います。通信制・定時制高校は中学校よりも時間的な部分での、より柔軟な対応が可能だと思いますので、そこを武器に、今後も実践と検証を繰り返しながら多様な学習支援が行われ、科技高の教育活動がますます充実し、発展されることを祈念しています。

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」を終えて

臨床心理士 大内雅子

私は普段、様々な事情があって家庭で暮らすことができない子ども達が暮らす児童養護施設で臨床心理士をしている。子どもたちは、家庭で受けてきた不適切なかかわりによってさまざまに傷つきを、さらに自分が暮らしていた地域や学校から、ある日突然別れも告げられずに生活する場所を移らざるをえなくなったことへのやるせなさやあきらめといった複雑な思いを抱えながら暮らしている。「福祉」の領域である。「教育」や「学校」とは、子どもたちが育つ上で直線上にあるが、そこで支援していく中では真逆の視点を持つことが多い。

今回、科学技術学園高等学校（以下、科技高）の文部科学省委託事業に協力をお願いされたとき、私に出来ることがあるのだろうかと思いを悩ませた。ひとつには前述したように、日常的なフィールドワークが福祉であること、二つ目には学校や教育といった文化に触れることが久しく、知識がないこと、三つ目には私自身が学校という場への苦手意識が強いことが挙げられる。しかし事業説明において「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」であること、そしてこの事業を通して科技高が目指そうとしていることをお聞きし、何か出来ることがあれば一緒に考えたいと思いなおし、お受けすることにした。

事業は、(1) 学び直しと学習意欲の回復につながる調査研究、(2) 特別に支援を要する生徒への学習教材の開発と他の教育団体との協力体制の構築、(3) 特化した支援を要する生徒への学習教材の開発と学習支援の構築、(4) 全日制において学習の継続が困難な生徒に対する学習支援教材の提供と全通併修についての調査研究、の4項目に分かれて構成されている。この項目を見るだけでも、科技高が一般的に知られている高校と異なる「学校」であることが理解できる。さらに、労働等の理由で全日制に進めない青少年に対して教育を提供する場として作られた定時制・通信制高校ではあるが、時代の流れとともに、そのあり方も変化している。その変化に応じながら、どのようにひとりひとりへの支援を「学習」という切り口からアプローチできるかの模索しようと、この事業を受けたという背景が私の興味関心をひいた。

特に(1) 学び直しと学習意欲の回復につながる調査研究は興味深く聞かせていただいた。私が普段関わっている児童養護施設で暮らす子ども達も同様の課題を抱えているからだ。保護者からの不適切なかかわりやいじめの日常化など、家庭や地域社会、学校から孤立していた過去を持つ子ども達は、学習はおろか、生きることへの意欲すら失っていることが多い。生の根本に疑問を抱いている彼らにとって、学校へ行く意味、勉強する意味を見いだすことは難題であり、優先順位は高くないことが多いが、日々頭を悩ませていたりもする。この共通する課題に対して、学校現場の先生方はどのように捉え、どのようにアプローチをしていくのであろうか。

分析結果から、学習意欲低下の要因はいくつかが複雑に絡みあい、家庭要因が大きく関係していることが明らかとなっている。しかしこの研究では学校生活に限定しながらも、学習以外で「自分の居場所や存在を肯定的に感じられる」ための工夫を探っていく。高等学校教育は、学習を教え、生徒を進級させ卒業に導くこと、そして学校に合わない生徒、やる気を失った生徒はドロップアウトをするものだと捉えていた私にとって、この研究で行おうとしていることは従来の学校の役割の概念を打ち破り、科技高が本気で挑戦・変革をしようとしていると肌で感じた。

学習が遅れがちな生徒には、授業の工夫によって意欲を回復していく生徒と、学習という切り口だけでは学年が進むにつれて意欲を失っていく生徒の、大きく 2 つの傾向があることも分かった。そのような生徒に対して、先生方が工夫・試行錯誤をし、科技高の生徒に合った内容をタブレット教材という形にした授業を見学させていただいた。集団一方通行という従来の授業から一変、タブレットを用いることによって個別性が確保され、ひとりひとりの進度や理解が教師に伝わり、フォローアップできるという双方向が実現されていた。また 2 人の生徒が一つのタブレットを使用することによって、相談や意見を述べ合うといった生徒間のコミュニケーションが活発に行われたことも、この工夫の効果の一つだろう。

他にも、少人数で学習や課外活動を行うことで居場所づくりを目指したり、行事で役割を与えることによって存在意識を高めたりする工夫もなされていた。これは一見すると多くの学校で導入している方法であるが、意欲が失われている生徒にとって、学校で提供された活動に参加すること自体が困難を極める。そこで先生方は、丁寧なコミュニケーションからひとりひとりのニーズや性格を見だし、コミュニケーションを通して機会の提供を行っている。まさにノーニーズ、ノープレゼンテーションの原則に従って、教員の意識改革も狙った取り組みである。どんなに素晴らしい機会が存在していても、相手のニーズに合わないもの、あるいはそれが一方的であれば宝の持ち腐れとなる。機会の提供だけでなく、それを潤滑に行うための根本の在り方に目を向けて研究がなされているところにも、科技校の本気度を感じた。

今回は (1) についてのみ言及させていただいたが、他 3 つの研究についてもノウハウやテクニックにとどまらない、人が人とともに生きていくときに必要な在り方に目を向けた研究がなされていた。時代の変化とともに、通信制・定時制に通う生徒の変化を見届けてきた科技高のものがきや苦悩から生み出された視点のようにも思う。時代の変化はさらに加速し、便利なものにあふれていくであろう。教育の現場も同様に、便利なものが導入され、より一層の効率化が求められていくのかもしれない。科技高はいわゆる普通高校よりも実にさまざまな生徒が通っている。カウンセラーという立場から彼らを見ると、「普通」や「社会の常識」の枠には収まらないエネルギーや隠れた可能性を持った生徒が多くいると感じている。彼らと付き合い、向き合うことは時間や体力といった物理的なものさしでは到底図ることができない力が必要であろう。時代の波にうまく乗りつつも、原点に立ち返る戦いに挑んだ科技高の先生方に拍手を送りたい。

多様な学習ニーズに応じていくために：かぎこの調査研究に参加して

静岡英和学院大学教授 波多野 純

この調査研究の背景には、定時制・通信制高校において不登校生や全日制高校退学者の比率が増加しているという現状認識があった。そうした中で、効果的な学習支援の在り方を探求すべく、定時制・通信制高校に入学してくる生徒たちの学習意欲を回復させ、学習をより効果的にするための支援方法等について、さまざまな研究が行われてきた。

私自身が不登校経験者の適応回復に関心を持っていることもあり、本調査研究はいずれも興味深い取り組みばかりであった。とりわけ、ICTを活用した教材開発、学習指導方法の改善、および学校行事の工夫によって学習意欲を高めようとする3つの取り組みには、非常に関心を持った。以下では、この3つの取り組みについて若干の感想を述べる。

定時制・通信制高校におけるICT活用について

授業にタブレット端末を導入し独自の教材を活用した取り組みにおいて、タブレットの導入があらゆる生徒の学習意欲向上に直結するわけではないという調査結果が得られた。この結果は、ICT活用の今後を考える上で重要な示唆を与えているように思われる。タブレットなどの機器それ自体の物理的な存在は、学習意欲を高める直接の要因にはなり得ない。しかし、それが示唆することは、必ずしもコンテンツとしての教材作りが重要だという方向性だけではないだろう。今後は機器を使用する環境や文脈のインパクトにも注意を促したい。子供や若者は、日々大量の情報をスマートフォン等の端末を通じて収集し、知識を増やしている。近年注目されている「ゲーミフィケーション」という概念は、学習場面をゲーム化（ゲーム的な構造）にすることによって、意欲を持続的に高めようとするものである。タブレットを使って遊ぶことを先におぼえた生徒たちに、まず楽しめる文脈を設定することはできないだろうか。

ペアワークへの期待

学力や意欲に幅のある生徒たちに対して効果的に指導するためには、少人数・個別指導が有効であることが指摘された。学校教育は、効率的な集団教育を前提として設計されたものであり、小さな塾や昔の寺子屋とは設計思想が違って良い。個別指導は集団教育とは一見対極にあり、学校に導入するにはいろいろなハードルがあるように感じられる。

しかし、個別指導をいかにして学校に導入するかを考える手がかりとして、ペアワークの取り組みは重要な示唆を与えると感じた。ペアワークは、個別教育と集団教育を同居させる取り組みであり、大学教育で1990年代から活用されてきたティーチング・アシスタント（TA）制度などに近い特徴を持っている。TAやその派生形としてのステューデント・アシスタント（SA）は、大学でも改めて注目されているが、その背景には、大学生の多様化による集団教育の効率性低下を補う意味があると考えられる。

今後は、学校でのペアワークや個別指導を支える技術として、ICTがより重要性を増すのではないだろうか。この2、3年で注目されるようになったブレンデッドラーニング（学校における集合学習とeラーニングの組み合わせ）は、現在は企業研修での活用が先行しているようだが、定時制・通信制高校には学校でこれを導入する基盤がすでにあるという意味で、アドバンテージを持っているように思われる。

「習い事クラブ」の可能性

学校行事の工夫に関して、「習い事クラブ」や行事運営に生徒中心の視点を導入するという試みが紹介された。共通の趣味や関心を媒介にして生徒同士を結び付ける取り組みは、全日制の学校でも盛んにおこなわれているように、生徒の居場所づくりを促す可能性がある。しかし問題は、大学で観察されるように、部活動の集団性を回避して学生の多くがサークルに集まるようになり、さらに最近ではサークルにすら人が集まらないという傾向があるということである。

ここでもタブレットと同様に、サークルやクラブ活動の効果を有益なものとするための条件を考える必要があるだろう。複数の生徒が参加すれば、当然活動への熱意や意欲には温度差が生じる。そのズレがまさに集団らしさなのだが、それを苦手とする人たちにちょうど良い温度を共有してもらうにはどうしたら良いだろうか。集団への苦手意識が平均的に高い生徒たちの間で、集団を心地よい居場所にするには、生徒たちの集団形成を支援するファシリテータが必要なかもしれない。そのファシリテータを誰が担うと効果的なのかも含めて、今後の検討課題である。

まとめと感想

今後重要であると思われる視点として、「ストレングス」という視点を提示しておきたい。意欲低下や不適応状態の改善に関して、突破口となる「その生徒の強み」または「その生徒が現時点でできていること」への注目が重要ではないだろうか。得意な方法やできていることを起点にして、そこに新しい学習や行動を接続できれば、変化が起きやすいかもしれない。たとえば、「毎週1回しか学校に来ない」と認識するのではなく、「毎週1回は確実に来ている」と捉え直すだけで、「できていること」は1つ増えたことになる。「じゃあ1回を1.5回にしてみようか」と考えることはできないだろうか。

この調査研究に参加することができたことで、3年間にわたって上のようなことをあれこれと考える機会を得ることができました。本当に有益な体験となりました。どうもありがとうございました。

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の調査に参加して

静岡英和学院大学教授 林智幸

本事業は4つの調査で構成されているが、「学習意欲が維持しにくい子どもに対して、レベルに合った学習教材を使わせることで、学校行事の体験を通して学習意欲を向上させることが可能であるかどうか」を共通項目としていると言えよう。そこで「学習教材」と「学習意欲」の観点から感想・意見を述べたい。

現在の学校教育では一斉授業型が主流となっているが、このタイプの授業法は平均的な理解力を持つ学習者を想定しているため、学習者の理解レベルによっては授業についていけない子どもが出てくる。この問題をフォローする1つの改善案として、学習者のレベルに応じた、学習進度を調整できる個別学習教材を準備する方法であろう。本調査ではまさに、この学習教材の開発の必要性を訴えており、今後重要となる課題である。

ただし、具体的にどのような学習教材を開発するかは今後の検討課題であろう。例えば、そもそも個別学習教材はどのような要件を満たすべきかについては、「プログラム学習」における「スモールステップ」「即時確認」「積極的反応」「マイペース」「学習者検証」「フェイディング」などの学習原理が参考になるだろう。

また、学習成果のフィードバックを相対評価から到達度評価に変更しているが、この修正は妥当と思われる。学習評価研究によると、到達度評価は相対評価に比べると、学習の強制感を強めたり、自分の有能感を強く感じさせる傾向があることが示されている。すると、本調査が想定する「他の子どもに比べて相対的にできないと感じている子ども」には到達度評価を適用した方が、強制感を軽減、有能感を増大させる効果が期待される。

外からの強い働きがなくとも、自発的に何らかの行動を行おうとする傾向を「内発的意欲（内発的動機）」として、長年研究されている。内発的意欲を説明する枠組みはいろいろあるが、例えば、「熟達性志向」「自律性志向」「関係性志向」の3つの要素で構成されているという仮説が最近注目されている。すなわち、「上手になりたい」「自分で決めたことに取り組みたい」「他者との絆を持ちたい」であり、「自分でやろうと思って決めたことに対して、上手にできている。そんな状態を、私が絆を感じている重要な人に認められている」という認識があるときに内発的意欲は高くなるとされる。

この仮説に沿って本調査を概観してみよう。すると、レベルに合った学習教材による達成数の増加による「熟達性志向」への働きかけ、学校行事の体験を通して主に「自律性志向」への働きかけ、生徒への熱心な指導をする教員の存在による「関係性志向」への働きかけ（主に不登校児の調査において）、などの数々の指導が内発的意欲に影響を与えていると想定している。実際の調査結果を見ると、必ずしも想定した指導効果が確認されていないものもあるが、調査の注目点としては妥当であると思われる。

本調査は実践研究として行われ、統制されていない「生の教育場面」を対象としている。そのため、現状把握と「生の教育場面」における指導効果の検証を優先して研究がされている。今後は、より厳密な原因と結果の関連性の追求が求められるだろうが、その際、これまで述べた先行研究の成果が参考になると思われる。

研究収録Ⅲ 平成29年度

文部科学省委託事業

平成30年3月9日

学校法人 科学技術学園

理事長 杉下俊雄

東京都世田谷区成城 1-11-1

印刷所 株式会社 東京アイデアフォース

東京都港区新橋 5-26-8
